自分たちができること ～パヤタスのゴミ山を通して～

氏名 ： 浅野 隆二郎　　学校名 ： 仙台市立中山小学校
担当教科 ： 全教科　　実践教科 ： 総合的な学習の時間
時間数 ： 7 時間　　対象学年: 第 6 学年　　人数 ： 39 名

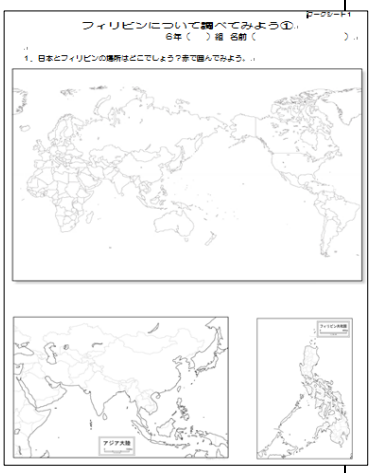
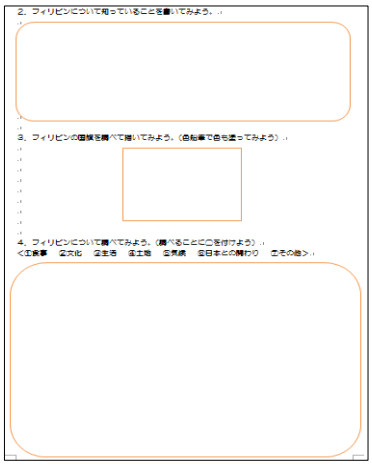
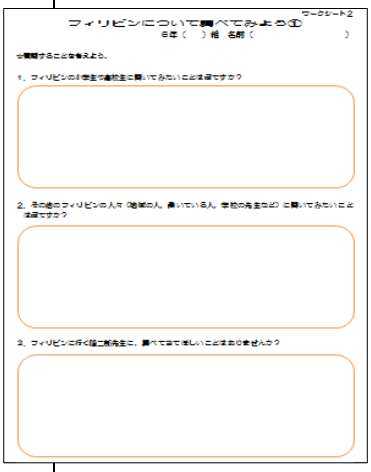
【実施概要】

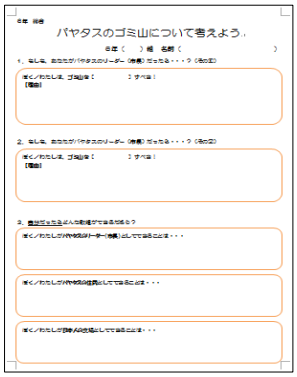
<table>
<tr><td colspan="3">【1】単元のテーマ・目標</td></tr>
<tr><td colspan="3">自分たちができること～パヤタスのゴミ山を通して～</td></tr>
<tr><td rowspan="4">【2】
単元の評価規準</td><td>（ア）関心・意欲・態度</td><td>多様な文化や価値観に共感し、尊重しようとする。</td></tr>
<tr><td>（イ）思考・判断・表現</td><td>物事を論理的に考え、自分の考えを表現することができる。</td></tr>
<tr><td>（ウ）技能</td><td>問題の解決策を提示することができる。</td></tr>
<tr><td>（エ）知識・理解</td><td>自国と他国の関係を意識し、物事を地球的視野で理解することができる。</td></tr>
<tr><td>【3】
単元設定の理由</td><td colspan="2">【児童観】
担任をしている 6 年 1 組は、男子 17 名、女子 22 名の計 39 名である。児童らが 3 年生、5 年生のときにも担任をしており、小学校生活 6 年間のうち半分を共に過ごし、間近で成長を感じている。どの授業においても積極的に集中して臨んでおり、児童の反応も良好である。感想や振り返りを記述させる際、多くの児童が自分の考えや思いを上手に伝えられている。失敗や間違いを恐れることで、理解はしているが全体の場で共有する児童が固定化しているという面もある。
生活面においては、休み時間になると男子を中心に外で遊んでいる。体を動かすことが好きな児童が多い。男女とも明るく活発な児童が多くおり、誰とでも仲良く過ごすことができる。また何事に対しても意欲的に活動しており、係活動や当番活動、委員会活動やプロジェクト活動など、自分の与えられた役割には責任を持って行動している。

【教材観】
本単元は、フィリピンを通して世界を見つめていくことを目的としている。実際に足を踏み入れて見聞きした経験を通して、子どもたちに生の情報を伝え、日本との相違点に気付かせたり、遠くの国で起こっていることを自分事として捉え、考えを深めさせたりしたいと考える。また、フィリピンのみにとどまらずグローバルな視点を持たせたいため、SDGs（持続可能な開発目標）</td></tr>
</table>

	を本時の前後に実施する。フィリピンの現状（パヤタスのゴミ問題）を学ぶ前と後では児童の変容が見られるのかということについても注目していきたい。 【指導観】 　本時では「ゴミ山を閉鎖するということはどういうことか」をテーマに児童が問いを持てるようにし、住民・政府の立場の異なる二つの見方や考え方を深めていき、これから出会うであろう生活場面での判断力につなげていきたい。 　授業や読書などで海外についての地名などは知っているが、その国の詳細までは知らない児童が大半である。実際に担任がフィリピンへ行くということを伝えた際にも、「バナナ」「暑い」「遠い」という抽象的なことのみの返答であった。 　フィリピンを皮切りに、世界ではどんなことが起こっているのか、何が必要なのか、自分たちができることは何かなどを改めて考える場にさせたい。また、考えや行動の持つ意味やその大切さ、さらにそれに伴う自分の責任を踏まえた自律的な行動について理解を深める指導を心掛けていきたい。

【4】展開計画（全７時間）

時	テーマ	活動・内容	使用教材
1 2 （事前）	フィリピンについて知る ①②	・担任がフィリピンに行くことを話し、フィリピンから連想されることを挙げていく。 ・児童にとってあまり馴染みのないフィリピンについて、児童自身が調べ学習をしながら知識を深めていく。 ・担任に現地で調べてきてほしいことや聞いてきてほしいことなどを考える。   	・PC ・本 ・ワークシート
朝の会 帰りの会 朝自習 （研修後）	世界やフィリピンについて知る（特別編）	・「フィリピンあるある」と題して、実際に見聞きした現地ならではの出来事を、毎回一つずつ伝える。 ・『世界がもし１００人の村だったら』や『パヤタスに降る星』を読み聞かせして、世界やフィリピンに対しての各自の思いを広げる	・画像 ・本

3 4 （研修後）	フィリピンについて知る ③④ 	・フィリピンの概要を知り、現地の様子や人々の暮らしを知る。 ・町の様子、食文化、学校の様子などを知る。 ・フィリピンの『光』と『影』を知る。 『光』→経済、笑顔、夢など 『影』→貧困、環境、低所得、ゴミ山等 	・画像 ・実物
5	SDGs について知る① 	・「持続可能な開発目標」を取り上げ、世界を変えるための 17 の目標について簡単に知る。 ・グループごとに「自分たちが世界のためにできることは何か」について考える。	・カード ・ワークシート
6 本時	パヤタスのゴミ山について知る	・住民がゴミを集めて生計を立てていること、政府がゴミ山を閉鎖することの２つを取り上げ、パヤタスのリーダーの立場から今後のゴミ山について話し合う。 ・話し合った後に、自分だったらどんな取組ができるかを考えさせる。	・画像 ・ハンドメイド作品 ・ワークシート  パヤタスのゴミ山について考えよう。
7	SDGs について知る②	・「持続可能な開発目標」を再度取り上げ、フィリピンについて学習する前とした後での児童の変容を確認する。 ・グループごとに「自分たちが世界のためにできることは何か」について考える。	・カード ・ワークシート

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	教師の支援 （指導上の留意点）	資料（教材）
導 入 （1 分）	1. フィリピンについて学んだことを振り返る。	○「フィリピンあるある」や既習事項の中で、思い出に残っていることを話し合う。 ・「光」と「影」の部分に意識して、双方考えさせる。	・以前のワークシート
展 開 パヤタスのゴミ山について考えよう （8 分）	2. 本時のめあてを知る。	○マンガ「ワンピース」を提示し、フィリピンのゴミ山について学習することを伝える。	・写真 ・地図
	3. ゴミ山の現状を知る。 ・ゴミを集めて生活をしている（スカベンジャー） ・一日約 500 円の収入 ・危険が多く潜んでいる ・土砂崩れで被害があった ・子どもが学校に行かず働く 	○ゴミを集めて換金することで毎日暮らしている住民がいることを理解させる。 ・それと同時に、政府がゴミ山を閉鎖する計画を立てていることを知らせる。（この段階ではまだ閉鎖決定は知らせない。）	・画像 ※スカベンジャー…ゴミの中から廃品回収を行い、わずかな日銭を稼いでいる
（26 分）	4. 今後ゴミ山はどうすべきかを考える。 残すべき or 閉鎖すべき ＜流れ＞ ①どちらの意見か明確にする ②話し合う（意見をぶつける） ③最終的にどちらか決める	○住民 vs 政府の構図を理解させ、自分がパヤタスのリーダー（市長）だったらどうすべきかという立場で、考えさせる。 ・話合いの途中で自分の意見が変わっても良いことを伝える。 ・ワークシートにも記入しつつ、自分の考えを発表させる。	・ワークシート ・ネームマグネット

		・どちらにも決められないという考えを尊重し、友達の意見を聞いてからでも良いことにする。 	
まとめ (10 分)	5. 一つの事例を聞いて， 自分の考えを振り返る。 	○SPNP に参加している人がいることを伝える。 ・自分だったらどんな取組ができるかを、あらゆる立場から考えさせ、ワークシートに記入する。 	※SPNP…「収入向上のために頑張るパヤタスのお母さん」 ・ハンドメイド作品 ・ワークシート

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）

① 導入場面

② ゴミ山の現状を知る

③ SPNP の商品の紹介

【6】本時の振り返り

・パヤタスのゴミ山を通して、自分たちができることを考える授業構想であった。本時で初めてゴミ山について扱ったが、既にフィリピンの「光」と「影」について学習していたので、児童はそれほど抵抗なくすんなりと取り組めていた。ゴミ山に対してマイナスイメージのみを多く持つこともなく、それを必要としている人もいる背景を理解し、そのうえで自分ならばどうするかという意思決定をしていた。
・児童らは積極的に発言したり耳を傾けたりワークシートに記入したりと、終始意欲的だった。一番身近な担任が見聞きしたことを、真剣に理解して自分のものにしようとする姿勢が見られた。
・「4. 今後ゴミ山はどうすべきかを考える」において立場（ゴミ山を残すか閉鎖するか）を明確にする際、初めはちょうど半々くらいの分かれ方だった。担任の思いが偏りなく児童に伝わったと思いたい。
・その後それぞれの立場で意見を出し合い、相手の考えを理解したあと、再びどちらの考えに賛同するかを尋ねた。すると、何と誰一人として考えを変える者はいなかった。（参考までに、事前に実施した隣のクラスでは若干の変動が見られた）
・このことから、肯定的に判断すると “自分の考えを貫き通し、確固たる思いを持っていた”と言えるが、捉えようによっては“相手の意見を受け止めずに自分の思いを優先させた”とも言える。この辺りの指導方法や授業の中身の精選をしていく必要があると感じた。
・授業の最後に、①パヤタスのリーダー、②パヤタスの住民、③日本人の立場、の 3 つの異なる視点から、自分ならばできることを考えた。立場を明確にしながら自分事として捉える活動は、今回の道徳における必要な要素であった。
・フィリピンの現状を知り、そこに関わる人たちの思いを考えたことで、多様な文化や価値観に共感し尊重することができるようになった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

・「ぼくは、フィリピンの名産物を買ったりフィリピンの良いイメージを世界に広めたりしたいです。」
・「バスケットボールが盛んだと聞きました。なので、バスケの大会を開催して、子どもたちの笑顔が続くように、大人たちが子どもたちに夢を与えられるようにしてほしいです。」
・「私たち自身がパヤタスのことをもっと知って理解し、考えることが大切だと思いました。」
・「フィリピンに行くのは難しいから募金をします。あとは、日本の服や食糧をフィリピンに送ります。」
・「世界には日本のように豊かな国だけではないということを多くの人に伝えたいです。」
・「パヤタスまで行って子どもたちに日本のいろいろなことを教えてあげたいです。子どもたち全員に学校へ行かせてあげたいです。」
・「大人になったら青年海外協力隊になって、フィリピンに行って何かしてあげたいです。」
・「JICA という団体に入って、フィリピンや開発途上国を手伝いたいです。」

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

・開発途上国に対する考え方（マイナスなイメージのみからの脱却）
・知らないことを知る楽しさや喜び（衣食住における文化の違い、世界に対する興味・関心の増加）
・日本人としてできること（得た知識の発信、フィリピン産の物品の購入）

【途上国・異文化への意識の変容について記載下さい】
（授業前） ・フィリピンのイメージ･･･「バナナ」「暑い」「遠い」「島国」「イスラム国と戦っている」など ・多少の異文化理解（アメリカ人の児童がクラスに在籍していた関係上） ・途上国における知識・理解は担任を含めて皆無（インターネットや図書の本、担任が知り得た微々たる情報などから基本的なことがらのみ伝えた。）
（授業後） ・フィリピンのイメージ･･･「光と影」「貧富の差」「笑顔」「日本と似ている部分がある」「一生懸命」「ジョリビー」などが、上記の内容に追加された。 ・フィリピンを通しての途上国・異文化理解（１つの国を皮切りに，開発途上国が世界中にあること、それぞれの国でさまざまな取組が行われていること、課題が山積していることなど、多角的な視野で物事を見ることが必要だと知った。） ・SDGs に対する理解（本時の授業の前後に実施した。持続可能な開発目標の中で、児童が特に大事だと考えるものを 1 つ選ぶ活動を行った。意見が偏るかと思っていたが、児童の数だけ考えもあり、理由も納得のいくものばかりであった。）

【8】自己評価

1. 苦労した点	・自分自身が初海外だったために、フィリピン以外の国々については手探り状態のまま進めていかざるを得なかったこと ・開発教育は、深みにはまるとなかなか抜け出せないこと（実践したいことが多過ぎて、目的意識をもって絞っていかないと大変になる） ・本時の展開部分「４」における、一定の条件を考えていなかったこと（児童は「全てのゴミ山ではなく一部ならば･･･」や「住む場所が保証されるならば･･･」などの意見があった。今回は条件を設けずに、２つのうちどちらかを選ぶ形式にした。そのことで悩む児童もいた。）
2. 改善点	・児童が主体的になる時間を多く確保すること（本時で言うと、4 と 5 の場面。道徳という教科の特性を生かして、最終的には自分事として捉えさせ、責任ある行動ができるところまで持っていきたい。） ・具体物を多く活用すること（ネットからの画像も良いが、実際に海外研修で教師が撮った写真や現地で購入したモノは、児童の食いつきがまるで異なる。なお、写真は教師が写っているものだとさらに効果的。） ・研修前の児童の開発途上国に対する考えと、研修後の考えが一目で分かるようなワークシートの作成（比較することで、どこの場面で意識の変容が見られたかが教師によっても児童にとっても分かりやすい。）

3. 成果が出た点	・子どもたちと共に、自分自身が世界に目を向けて自分の思いや考えをより強く持てるようになったこと ・「自分事」として捉える場面が多くなったこと ・フェアトレード商品を意識して購入するようになったこと ・他の国の現状を知ることで、日本という自分たちの国の良さを改めて実感することができたこと ・子どもたちが遠い遠いフィリピンを身近に感じたこと
4. 備考（授業者による自由記述）	・＜研修参加の目的と研修への期待＞ 「物事を多面的に見る」― いつも子どもたちに言っていた言葉だ。そしてこの言葉こそが、今回の研修参加の目的の１つである。日本を飛び出して、グローバルな物の見方を自分自身が身に付けてきたいと思っている。 ・＜研修中に思ったこと・感じたこと＞ みんな笑顔で陽気だった。この国には貧富の差はあれど、それをも払拭する程の、あたたかく包んでくれるものがそこにはあった。 ・＜帰国後、授業実践をしての思い＞ 子どもたちの、フィリピンをはじめとする開発途上国に対する意識の変容が見えた。自分が当初思っていた「多面的に見る」ことが、少しでも子どもたちにも伝わっていたのかもしれないと思えた。教師海外研修は、自分の眼で見て肌で感じた開発途上国を、直に子どもたちへ還元することができた。 ・開発教育についてまるで無知だった一人の教員が、初海外にもかかわらず多くのことを吸収することができた。子どもたちに授業をすればするほど、自分の開発教育の知識の稚拙さに改めて気付く。子どもたちのために、自分自身のために、もっと世界情勢を正確に伝えられる教師でありたいと感じた。そのためにも私自身が「自分ができること」について真剣に考え、行動に移していかなければならないと強く感じた。

参考資料：

・「フィリピンのことがマンガで 3 時間でわかる本」（明日香出版社）
・「生徒の生き方が変わるグローバル教育の実践」（メディア総合研究所）
・「世界がもし 100 人の村だったら」（マガジンハウス）
・「パヤタスに降る星 ごみ山の子どもたちから届いたいのちの贈り物」（中央法規）
・「どうなってるの？世界と日本 私たちの日常から途上国とのつながりを学ぼう」（JICA）
・「学校に行きたい」（JICA）
・「私たちが目指す世界 子どものための「持続可能な開発目標」」（JICA）